

収蔵資料情報の共有に向けて ズニ博物館長の民博訪問

二〇〇九年一月二〇日、民博館長室に穏かな笑顔を携えた長身の男性がやって来た。北米先住民ズニ・プエブロのアスイウィ・アワン博物館（以下、ズニ博物館）館長、ジム・イノーテ氏である。

松園万亀雄館長（当時）と挨拶を交わすと、イノーテ館長はノートパソコンを起動させ、四〇分ほどのスライドショーを用いてズニ博物館の概要を紹介した。

●伝統的知識を若い世代に伝える

一九九二年、この博物館は約一万二〇〇〇人が生活するニューメキシコ州中西部のズニ保留地内に設立された。目的は、主として欧米諸国の博物館が保管するズニ関連の資料を利用して、失われつつある彼らの伝統的知識の一部を若い世代に伝える機会を確保することだという。そのため、ハーバード大学のピーボディー博物館、北アリゾナ博物館、マックスウェル博物館などと、収蔵品の情報共有に関する提携を結んできた。

人類学などの専門家ならば、「ズニ」という言葉を聞けば、ルース・ベネディクト、『文化の型』、アポロ型、といった語句を連続的に思い

浮かべるかもしれない。あるいは、トルコ石と珊瑚と銀を素材とするジュエリーを思い浮かべる方もいるだろう。

しかし、一九九〇年代にNAGPRA（米国先住民墓地保護・返還法）を根拠にスミソニアン博物館と交渉して「戦争神」像を返還させるなど、政治力を行使する現代北米先住民コミュニティとしてのズニを思い浮かべる方はそれほど多くはいまい。

イノーテ館長の表敬訪問に際して、同席した私たち（岸上伸啓教授、五月女賢司機関研究員、筆者）は、その真意をくみとろうと彼の発言に細心の注意を払っていた。

松園館長が提供したズニ関連収蔵資料リストに目をやると、彼は「これらを収蔵庫で熟覧し、資料情報を閲覧させてほしい。将来的に資料情報をズニの人びとと共有するネットワーク構築に協力してほしい」という要望を提示した。

●博物館の役割を三〇年間議論

そもそも伝統的知識とは、美術工芸品などの動産文化財、聖地・遺跡など不動産文化財、写真・映像等民

族誌的記録、生業・技術・医学的知識や生物多様性関連知識、フォークロアの表現、言語等を指す。

ズニのあいだではそれらの共有の範囲や伝達方法に多層性と一定のルールがみられる。たとえば、非ズニでもアクセス可能なもの、非ズニには公開しないもの、宗教結社の加入者やクラン成員にのみ知識の共有が認められているもの、結社やクランの特定の役割に就く人物しか管理しえないものなどである。

ズニ博物館は開館までの三〇年間を、モノや情報を収集・管理・公開する博物館の役割をめぐる議論に費やしており、イノーテ館長もこの点に関して慎重な姿勢をとっている。

民博の「標本資料目録データベース」（約二四万点）にて「ズニ」や「Zuni」を検索すると、木彫・石彫人形、土器、装身具など、数十点が確認できる。

その後、資料熟覧と管理情報閲覧を申請したイノーテ館長は、本年七月に来日し民博再訪を果たした。両館の次なる課題は、収蔵資料情報の共有に向けた具体案の構想である。

伊藤敦規

民博外来研究員（日本学術振興会特別研究員P.D）

専攻は社会人類学。米国南西部先住民が制作するモノ（アート商品・博物館資料）と情報・知識の管理（先住民の知的財産問題）の相関性について人類学的に研究している。



イノーテ館長（左）は、「ズニのモノと知識の旅が今はじまった。次世代の博物館関係者と利用者のために協力を願います」と記した。右は松園前館長

